

第6回 双葉町復興まちづくり委員会 議事概要

- 日時：平成24年12月11日（火）
（前半）午後1時00分～午後1時45分
（後半）午後3時45分～午後4時30分

■場所：双葉町役場埼玉支所 4階 家庭科室

■出席者：別紙座席表のとおり

■議事概要

1. 開会

2. 議事

（前半）

（1）木村委員の講演

「双葉町の帰還可能時期の予測について」

資料2に基づき、木村真三委員による講演と質疑。

講演概要は別記のとおり

（後半）

（1）部会の審議状況について

生活再建部会 高野重紘部会長、ふるさと再建部会 清水修二部会長、きずな部会 高野泉部会長より報告後、質疑。委員の主な意見は以下のとおり。

- 子どもたちは学校教育を通じて町のことを学習するが、それができない子どもたちに対して町のことどのように教育していくが課題。
- 山田地区は放射線量が高いために、墓地を含めて除染はできないと思う。仮の町ではなく、新生双葉町をつくり、その場所にお墓を移すことも考える必要があると思う。
- 行政区単位で住所がお互いわかる形をつくってもいいのではないか。
- 避難先で住民同士が連絡を取るために、個人情報のために役場が確認してから教えるという対応になっているが、それを打開する方法はないのか。
- お墓の線量をしっかりと測定し、共通する情報を持つべきである。そうしなければ、机上の空論になってしまう。
- 民家の近くにないお墓は、道路が直されていない部分があるので、調べていかなければならないと思う。また、他の町村に比べ、旧道沿いの倒壊がひどい。地盤に何か大きな問題がある可能性があるので調べる必要がある。
- 騎西高校でカフェを行う際に、福島県の震災補助支援事業の補助金を得る

ことができたが、福島県外ということで、雇用事業補助金は除外された。利益が上がる商売ではないために、行政側にも支援体制を整えてほしい。

- 農業を再開したい人は、福島県内に避難されている人には、助成の対象になるが、福島県外に避難している人は、助成から除外されてしまう。このようなことが解消されるように福島県にお願いしたい。

(2) 復興まちづくり計画の策定の進め方について

資料4に基づき、事務局より説明後、質疑。委員の主な意見は、以下のとおり。

- きちんと段取りを組んで行うことはいいと思う。しかし、国の方針や期限が設けられている事業展開がある。復興に向けた国や県の動きを捉えながら、連動させていくという課題があるわけだから、その情報を節目節目で流す必要があると思う。

(3) その他

- 双葉町議会議員はなぜ欠席しているのか。この委員会に反対であるのなら、委員会に出席し、議会としての意見を述べていただきたい。計画(案)が議会で否決されたり、大幅修正されたりしたら、何もならないと思う。
- 町長、議会、町民が1つになって、進んでいかなければいけないので、双葉町議会議員には、出席してほしい。
- チェルノブイリ法では1m Svということになっているが、国が示している年間線量20m Svや50m Svという区分である。これで責任を持てるのかを知りたい。

3. 閉会

(別記) 木村真三委員講演「双葉町の帰還可能時期の予測」の概要

※この講演内容は事務局の責任編集で要約したものである。

(詳細は後日公表の議事録を参照)

- 私が10月2日に双葉工業団地前で採取した苔から、360万Bq/kgを超える非常に高い放射性物資が検出された。これは私が行った1,000例以上の調査の中で、昨年3月16日に採取した山田行政区の土壌に次ぐ、2番目に高い放射性濃度を持っていて、これが現在でも検出されているということを理解してほしい。
- セシウム134、137の他にも、高いレベルでアンチモン125、銀110mという新

たな核種が存在している。アンチモン 125 は福島第一原子力発電所から非常に近い地域でしか検出されていない。銀 110m も原発由来の核種である。このことは、双葉町へ帰還するための重要な材料になる。放射性物資というのは、セシウムのみではないということを理解してほしい。

- 帰還を考える上で、子どものことが 1 番大切である。今回、双葉北小学校を調査したところ、約 93 万Bq/m²という汚染が校庭から検出された。今後、ストロンチウムやプルトニウムも中心に調べていく必要がある。
- 放射線防護学の中では、線量が最大の場所で減衰する日数を見積もっていく。これまでのモニタリングポストで最大なのは山田行政区である。昨年 9 月 15 日からの 438 日間のデータを基に、今までの減衰をもって最適予測の結果は、1 μ Sv/h まで減衰するのに 12 年 6 ヶ月、0.23 μ Sv/h（文部科学省、厚生労働省で決定している「管理区域」に設定する値）まで減衰するのに 18 年、私が安全に暮らすことができると思う 0.1 μ Sv/h まで減衰するのに 21 年 2 ヶ月かかる。しかし、この減衰式は半減期が短い核種の影響を受けている。実際には、半減期が長い核種が長期間では支配的になるので、減衰曲線が変わってくる。このセシウム 134（半減期 2 年）とセシウム 137（半減期 30 年）の半減期を考慮し、最適予測を計算すると、1 μ Sv/h まで減衰するのに 67 年 4 ヶ月、0.23 μ Sv/h まで減衰するのに 131 年 2 ヶ月、0.1 μ Sv/h まで減衰するのに 167 年 4 ヶ月かかる。減衰率の誤差を考えても 165 年以上かかるというのが見えてくる。しかし、これはあくまでも高線量地区の山田行政区での予測である。同じ考え方による、石熊公民館における最適予測は、1 μ Sv/h まで減衰するのに 6 年 11 ヶ月、0.23 μ Sv/h まで減衰するのに 9 年 2 ヶ月、0.1 μ Sv/h まで減衰するのに 9 年 10 ヶ月にかかるということから 10 年以内に帰還可能な地域もある。このように、安全側に立って見積もると非常に長くなるけれども、線量が低いところはもっと早く帰還ができる。しかし、考えなければならないのは、放射性物質はセシウムのみではないことである。他の放射性物質の問題点や危険性を考えた上で 10 年以内に帰還できるのかどうか考えてなければならないのが、双葉町の特殊性である。
- 帰還が可能かどうかは結局のところ町民の皆さんがお決めにならなくてはならない。私が有識者として個人的な意見を申し上げれば、次の二つのことについて考えなくてはならないと思う。
- 一つは、プルトニウムやストロンチウムといった人体に影響を及ぼすような放射性核種について議論がなされていないことである。
- もう一つは、歴史のある双葉町が、すぐに帰還ができる地域、5、10 年かければ帰還できる地域、長い期間できない地域の 3 つに分断されてしまうことで、1 つ

にまとまって何とかしていこうという双葉町の気持ちまでも分断してしまうことである。心の分断が一番怖い。心が分断してしまうなら、帰還しない方がいい、というのが私の考えである。帰るという前提のもとで何年かかっても帰るという考え方は正しいが、それは今後どのようにそこを目指していくのかという対策とあわせて考えるべきである。最後は、町民の皆さんの決断である。

- 将来を考えると、若者や子どもが帰還できる条件を満たさなければ難しいと思う。チェルノブイリでは、法律上帰還してはいけない地域（排他的地域）で違法に高齢者が生活している。病院や学校等、全てがない汚染地域で自給自足の生活を送っている人がいる。このような形で帰還するよりも、双葉町民が双葉町というものを繋いでいくというのが大切であると思う。双葉町が分断されずに気持ちを繋いでいくことを私は望む。

第6回双葉町復興まちづくり委員会座席表

(敬称略)

三井所
鈴木 浩
清典

1 日時 平成24年12月11日(火)

全体(前半) 13:00~13:45

部会 14:00~15:30

全体(後半) 15:45~16:30

2 場所 双葉町埼玉支所 4階家庭科室

復興庁 佐藤 弘之 企画官	(関係者)	田中 清一郎	清水 修二	駒田 義誌	相楽
福島復興局地域班 小野寺 恵二 参事官		高野 重紘	宇杉 和夫	事務局 平岩 邦弘	事務局 橋本
		高野 泉			西牧
福島復興局地域班 二階堂 雄二 係員	(関係者)	井上 六郎	木村 真三	井上 一芳	吉野
福島県 避難地域復興局 安斎 浩記 総括主幹兼副課長		中村 富美子	中村 希雄	高野 憲一	事務局 佐野
福島県 避難地域復興局 小椋 貴博 主事		岩元 善一		武内 裕美	山田
税務課 大沼 武 課長	(関係者)	遠藤 直敏	木幡 敏郎	大住 宗重	大内
生涯学習課 今泉 祐一 課長		(代理) 横山 泰仁	西内 芳徳	(代理) 熊 勝好	事務局 中陳
		松本 浩一		(代理) 山本 一弥	
		荒木 幸子	鶴沼 友恵	山下 正夫	
		笠原 真一	渡邊 ゆかり	大橋 利一	事務局
		吉田 清己			